


エージェント AI 元年：Microsoft Build 2026 がもたらす知財実務の変革と導入戦略

Microsoft Build 2026 の主要発表



AIに「聞く」から「任せる（委任）」への転換 
従来のチャット型支援を超え、自働エージェント「Microsoft Scout」やマルチエージェント・オーケストレーションが実務の核となります。

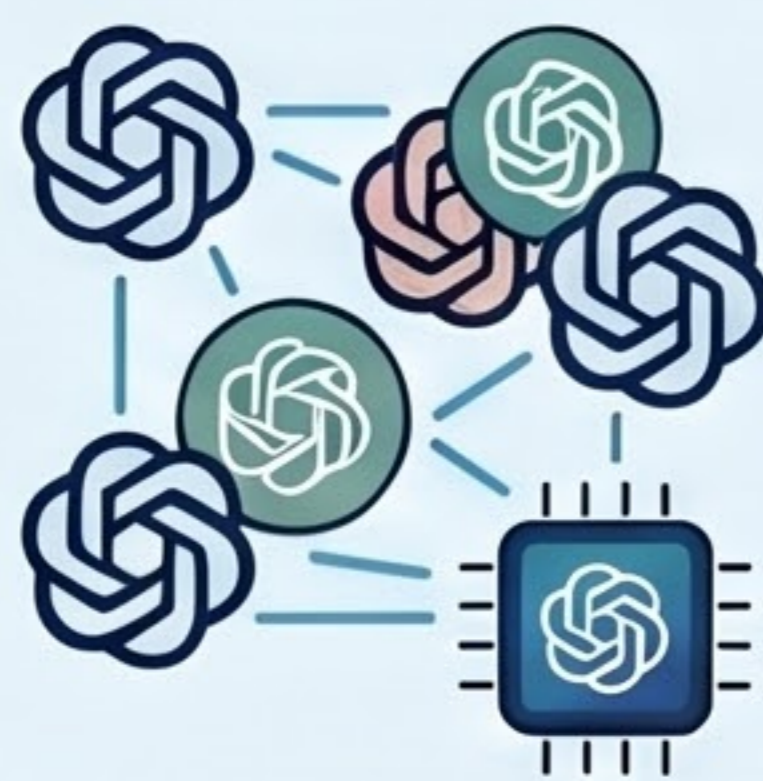


「Model-Diverse」設計の採用

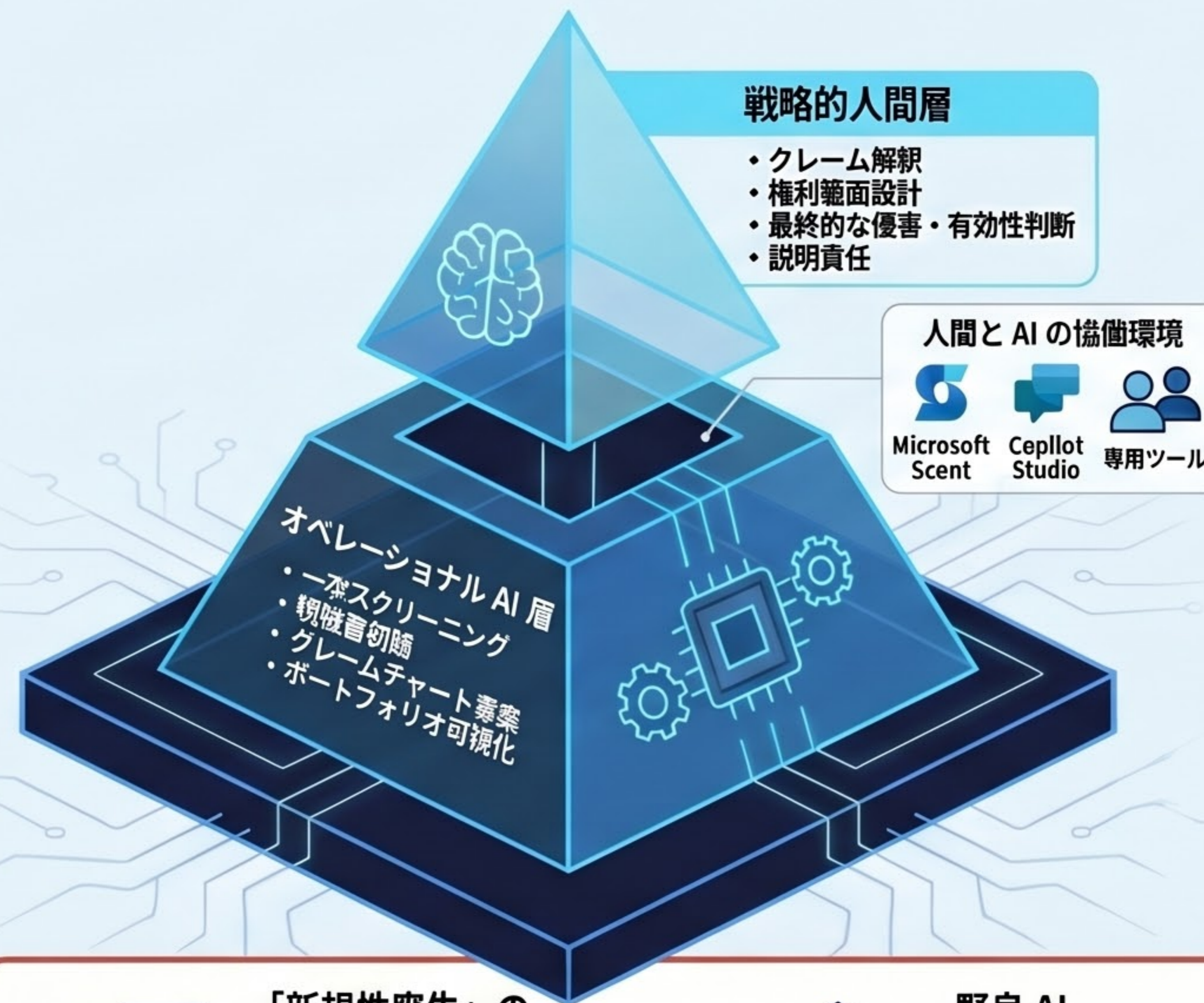
OpenAI の GPT 系に加え、Anthropic Claude を正式採用し、権限モデル MAI-Thinking-1 など用途に応じた最適なモデル選択が可能になりました。



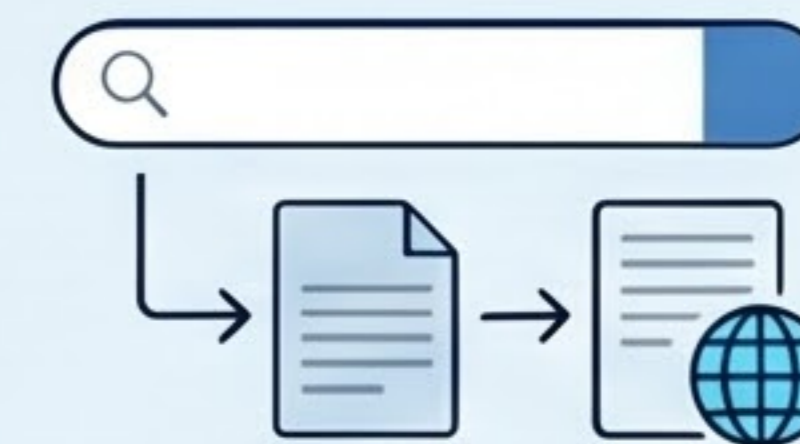
Microsoft IQ による知的コンテキストの統合
組織内の構造化データと Web 情報を統合し、エージェントの判断精度を高めます。



二層型組織モデル



知財業務への具体的インパクト



先行技術・無効資料調査の自律化

Foundry IQ を活用し、クエリ分解から多ソース規助検索、結果の誘合までエージェントが自律的に実行可能になります。



明細書ドラフティングの個別化

「Frontier Tuning」により、自社の過去の父接明細書スタイルを学習させたエージェントが、ドラフト作成を 20~50% 効率化します。



汎用 AI vs 専用知財ツール
Microsoft スタックは「壘業・カバナンス」として構築し、Patlytics や DeepIP などの専用ツールと連携するハイブリッド適用が主決となります。

ガバナンスとリスク管理（最重要）



「新規性喪失」のリスク回避
USPTO 今日本弁理士会の権利に基づき、交公開情報の入力糊疎やデータ保持・離権利無しの発利条件の機蓋が不可欠です。



野良 AI (Shadow AI) の統制
Agent 365 と Entra Agent ID を活用し、種がどのエージェントにどの機密データへのアクセスを許可したかを極精に管理します。



Microsoft Purview によるデータ保護
最高機密ラベル (EXTRACT 権限制限) を付るし、エージェントによる不適切な機密情報の索引化や持ち出しを防止します。

導入の3段階ロードマップ

第1段階：基盤とガードレールの構築



利用方針の文書化、Purview DLP の有効化、居存の野良 AI エージェントの開綴しを御箇に乘信します。

第2段階：公開情報限定のパイロット運用



先行技術調査やランドスケープ分析など、新規性喪失リスクのない「公開情報のみ」を携う工種から存在を開始します。

第3段階：マルチエージェント・オーケストレーション



調査からドラフト交綴までの通綴したワークフローを構綴し、人間による承綴 (human-in-the-loop) を必消ノードとして組み込みます。